

奈文研

ニュース

No.32

NABUNKEN NEWS

Mar.2009



独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2丁目8-1
<http://www.nabunken.jp/>

漢魏洛陽城・北魏宮城2号門の発掘

2008年3月13日、中国社会科学院考古研究所と奈良文化財研究所との間で、中国漢魏洛陽城の共同発掘調査に関する協定の調印式がおこなわれました。奈良文化財研究所と社会科学院考古研究所は、これまでも北魏洛陽永寧寺・漢長安城桂宮・唐長安城大明宮太液池など20年来、共同調査の実績を重ねてきましたが、今回の共同調査は漢魏洛陽城中枢部の様相解明をめざすものです。本格的な共同調査初年度にあたる2008年は、春期（4～6月）・秋期（11～1月）の2回にわたりて発掘調査を実施しました。発掘期間中は研究員が中国に滞在し、写真・実測も専門の研究員を派遣して調査を進めました。

洛陽は中国河南省の北西部にある都市です。「九朝の都」と呼ばれる洛陽は、古代王朝の多くが都をおいた古都として知られています。同じく古代の都として知られる長安（現在の西安）にも近く、華北と華南を結ぶ黄河に沿った重要な地域に位置しています。この地域は「中原」と呼ばれ、古代国家が権力を争う歴史的主要舞台となっていました。

特に、漢魏洛陽城は東周・後漢・魏・晋・北魏などの王朝が首都を構えた遺跡で、その存続年代は延べ1600年にも及びます。そのため、紀元前の小さな城郭からスタートした漢魏洛陽城は、後漢時代には巨大な宮城となり、北魏時代には周囲に碁盤目状の条坊を完備する本格的都城へと発展してきました。この漢魏洛陽城を基礎として発展したのが、東アジア諸国の大都形成に大きな影響を与えた唐長安城です。このように、漢魏洛陽城の調査研究は、日本における都城の源流を探るうえでも重要と言えます。

2008年は、北魏時代における宮城の中心の部分、その門にあたる遺構の発掘をおこないました。北魏宮城の正門である閼闌門は、1999・2000年に社会科学院考古研究所が既に発掘していますが、2008年は

その北側の「2号門遺構」をおこないました。まず、春期の試掘調査で門の遺構の範囲を確認したうえで、秋期には遺構の全範囲を発掘しました。

その結果、大きな版築基壇をもつ門の全体像が明らかになりました。また、出土した瓦などの遺物から、門の創建年代を推定する作業も進んでおり、漢魏洛陽城の宮城構造の変遷を考えるうえで重要な発掘成果となりました。

奈良文化財研究所と社会科学院考古研究所との共同発掘は、4年間の計画になっています。来年度以降は、さらに北側の北魏宮城の中心地を発掘していく予定です。今後の調査で、漢魏洛陽城中枢部の様相がどんどん明らかになっていくことでしょう。三国志の英雄たちが活躍した場所で、日本都城制の源流を探る調査が続けられています。

（都城発掘調査部 城倉 正祥）



実測作業の様子

発掘調査の概要

飛鳥寺東南部の調査（飛鳥藤原第152-5次）

2008年11月、飛鳥寺の東南隅、飛鳥寺瓦窯のある丘陵の西で、倉庫建設にともなう発掘調査をしました。すぐ北側は1979年に調査されており、飛鳥寺南限の築地塀、掘立柱建物・塀、木樋、石組溝などがみつかっています。なかでも2間×2間の総柱建物は、道昭が飛鳥寺の東南隅に建立した東南押院の経藏として注目を集めました（現在は万葉文化館のある飛鳥池遺跡の北側とみる見解が有力です）。そのすぐ南を発掘することから、当然これらの遺構の統続がでてくるものと思っていました。しかし予想に反して、これらはまったく姿を現しませんでした。

かわりにみつかったのが、飛鳥寺の南方にあった通称「石敷広場」の東北コーナー部です。西に向かって北に約8度方位が振れる幅約20mの石敷です。北縁と東縁には大型の石を据え、その内側には川原石を敷いています。注目されるのは、石敷広場のすぐ東側にあった階段状の石組溝です。最上層では幅2.6mもある巨大なものでした。この石組溝は北へと延びていきますが、1979年調査区ではみつかっておらず、その行方が気になるところです。

それにしても、石敷広場の正体は何でしょうか。飛鳥寺は正方位にのっとって造営されていますが、なぜか石敷広場は方位が振れています。飛鳥寺の西には「楓の木広場」があり、さまざまな儀礼の場として機能しました。飛鳥の宮殿と楓の木広場を最短ルートで結ぶため、方位が振れたのでしょうか。

（都城発掘調査部 市 大樹）



石敷広場の東北コーナー部（西から）

石神遺跡の調査（飛鳥藤原第156次）

石神遺跡は齐明朝の饗宴施設と推定されますが、それ以外にも7世紀代を通じて造営が繰り返されたことが明らかになっています。

今回の調査は、遺跡の東限とその周辺を明らかにする目的としました。調査は10月から始まり3月まで続きました。その結果、7世紀前半と後半の2回の整地土の上に重なり合う掘立柱建物や塀などの遺構が多数確認されています。みつかった遺構の変遷は、8時期に分けられます。

今回の調査区の北側にある昨年度の調査区では、7世紀中頃とみられる南北方向の建物が確認され、これを石神遺跡の東限施設と推定しました。今回、この建物の統きとみられる大型の総柱建物を検出しました。さらにこの総柱建物以前にも、ほぼ位置を同じくする塀と建物を検出しました。このように、7世紀前半から中頃にかけて、東限を区画する施設は2回の建て替えがあったようです。また東限区画施設の東側には、遺構の展開が希薄で、ここに幅16m程度の通路が存在したと推定されます。

さらに、東限区画施設よりも古い南北方向の溝を確認しました。この溝はクランク状に折れ曲がり、基壇をともなうと考えられます。この溝からは大量の瓦が出土しました。この瓦が葺かれていた建物は、もしかすると仏教施設だったかもしれません。

7世紀後半にも再度の大規模な整地をおこない、東限施設も通路も消え、建物や塀が点在するようになります。このことからも遺跡の性格が7世紀後半に大きく変化したことがわかりました。

（都城発掘調査部 青木 敬）



7世紀前半～中頃の東限施設群（北から）

平城宮東方官衛地区の調査（平城第440次）

東方官衛地区とは、第二次大極殿や東区朝堂院が南北にならぶ平城宮中枢部の東側一帯を指します。昨年度の第429次調査で官衛区画の南部分で大きな土坑の一部を検出しました。今回の調査はこの土坑の全容を明らかにすることを目的としました。事前に地中レーダー探査をおこない、土坑の範囲を確認し、その成果にもとづいて255m²の調査区を設定しました。調査は2008年11月19日より開始し、2009年2月6日に終了しました。

発掘調査では、土坑の全体が明らかになりました。規模は東西約10m、南北約7mの不整形で、深さは約1mです。土坑内からは土器や瓦の破片が出土したほか、地下水に浸された部分には大量の木屑や自然木が層をなしていました。この木屑を含んだ層の木質はほとんど腐っておらず、ほぼ捨てた当時のままで残っていました。また土坑内の埋土や遺物には焦げた痕跡があり、当時、ゴミの量を減らすために火をつけて燃やしたと考えられます。

木屑層には木器や木筒、木筒の削り屑、木材を加工したときの削り屑が大量に含まれているため、すべてを取り上げて室内で丁寧に洗うことになりました。その結果、土ごと取り上げた木屑は2600箱ほどになります。木屑層から出土した木製品では檜扇が多く

みられるほか、用途不明の加工品も多数あります。

土坑から出土した木筒は現在200点ほどが明らかになっており、人名を列記したものや、字を練習した習書木筒が目立ちます。重要なところでは宝龜の年号を記したものや衛府、衛士といった役所に関わる文字を書いたものがありました。紀年や役所名はこの土坑の時期や官衛区画の性格を知るために重要な手がかりとなります。しかし、現在明らかになっている木筒はごく一部です。この土坑の時期や性格の判断は今後の木屑層の整理を待ちたいと思います。

また、この場所では土坑が掘られる前後に2棟の掘立柱建物が存在していたことがわかりました。土坑の底から検出された柱穴は東西棟の建物で南北2間、東西5間以上で北側に庇がついた大規模なもので、これは土坑に壊されていることから、土坑より古い時期の建物で、その規模は相当立派なもので、土坑が埋まった後に建てられた建物は東西4間、南北4間の正方形の建物です。規模はそれほど大きくはありません。このように、この場所の機能が時期とともに変化していたことがわかりました。

以上の成果は、東方官衛地区における官衛の構造や性格を把握するだけでなく、官衛のなかの変遷を解明するうえで重要な資料となるでしょう。

（都城発掘調査部 今井 晃樹）



木筒や木屑が大量に出土した土坑（北東から）



木屑層の発掘風景

カンボジアでの調査(近況報告)

雨期が終わった2008年11月からのカンボジアでの調査についてご紹介します。

まず12月1日に恒例のアンコール遺跡に関する国際会議が開催されました。この会議には研究所から4名が出席する予定でしたが、11月25日にバンコク国際空港が民主化要求デモによって占拠され、バンコク経由のタイ国際航空が全便欠航となりました。2名が出発できなくなり、善後策を協議した結果、今次の調査は中止しました。会議には先に現地入りしていた筆者を含む2名が参加しました。ハンガリーやによるコーケー遺跡での修復開始、アプサラの新事務所開設など新しい話題の多い会議でした。

発掘調査は中止になりましたが、12月6日には、物語ノラから贈呈されたラフテレーンクレーンが現地に到着し、西トップ寺院で待望の試運転をおこなうことができました。

2月には保存科学の調査チームが現地入りし調査をおこなうとともに、考古チームは西トップ寺院の発掘調査で出土した遺物の整理作業を開始しました。予想以上に中国陶磁が多く、優美な白磁合子や青磁の椀皿類が確認されています。中国陶磁が、どの時期にどれだけもたらされているかは不明で、共に出土した土器・陶器に関してもわからないことが多く、今後の整理作業が期待されます。また大量の瓦も注目されます。多くは須恵器のように堅く焼き締まり、表面には厚く緑釉がかかっており、ポストアンコール期の瓦研究にまたとない資料となることでしょう。

この事業は今、遺跡の状態の変化に伴って大きな転機にさしかかっています。今後も、研究所で慎重に検討を重ねながら進めていきたいと思っています。

(企画調整部 杉山 洋)



西トップ寺院出土瓦の調査

ベトナム政府より表彰される

2月9日、ベトナムハノイ市の文化スポーツ観光省において、表彰式がおこなわれました。主として2003年度から文化庁を中心におこなってきた、伝統集落保存への協力に対して、ベトナム国文化スポーツ観光大臣より、日本側の文化庁、奈良文化財研究所、昭和女子大学、国際協力機構(JICA)、ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)、国際交流基金が表彰されたものです。なお、集落調査の成果については、すでに『ハタイ省ドゥオランム村集落調査報告』として刊行しているところです。

表彰式には、当研究所の田辺所長をはじめ、坂東昭和女子大学長、西村ACCU奈良事務所長、JICAおよび国際交流基金のハノイ事務所長と、各機関の長が列席して盛大におこなわれました。田辺所長には、チャン・ティン・タン文化スポーツ観光副大臣より、表彰状および記念品が授与されました。所長からは、先日完成した調査報告書の英訳版を贈呈しました。

表彰式前の夕食会および当日の昼食会においては、ベトナム側の行政機関および研究機関の要職の方々や、国際協力をおこなう日本側各機関の方々との連携関係を構築することができました。

また、ベトナム側の配慮で、タンロン遺跡の見学をおこなうこともできました。

2月11日には、ベトナム中部のホイアン市において、期を同じくして訪越しておられた皇太子殿下にお会いする機会を設けていただきました。奈良文化財研究所がベトナムの文化遺産保存事業に協力しているとの紹介をベトナム政府から受け、殿下より「良いお仕事をされていますね」とねぎらいのお言葉をいただきました。

(都城発掘調査部 島田 敏男)



ハノイでの表彰式（左：副大臣，右：田辺所長）

■ 日韓発掘調査交流に参加して

当研究所では、2006年度から韓国の国立慶州文化財研究所と「日韓共同発掘調査交流協約」を取り交わし、双方の発掘現場へ研究員が長期にわたり参加し、研究交流をおこなっています。今回はその3年目にあたり、筆者は慶州文化財研究所に2008年7月22日から9月19日まで派遣されました。慶州滞在中には、統一新羅の寺院として名高い四天王寺址と、4～6世紀にかけて造営された新羅古墳群であるチョクセン遺跡の発掘調査に参加しました。

まず四天王寺址の発掘調査に参加しました。ちょうど、東木塔址という塔の基壇西半分を検出する調査の最中で、その検出作業に携わることができました。調査方法は、基壇化粧に用いられた地覆石の抜き取り痕跡を探し、そこから基壇幅や基壇に取りつく階段の規模を復元するなど、日本でよく用いる方法でした。私が検出した部分の遺存状態はあまり良くありませんでした。しかし、基壇東半分は残りがよく、画像碑などが積み重ねられている様子がはっきりと分かり、それは息をのむような美しさでした。

次に、有名な大陵苑の東側に位置するチョクセン遺跡の発掘調査に参加しました。私はかねてから新羅古墳に高い関心を寄せていたので、発掘調査に参加できたことは得難い経験となりました。発掘調査現場では、44号墳と呼ばれる古墳の墳丘調査、B2号という積石木椁墓の副葬品調査、B8号という甕棺墓の調査など、数多くの経験ができました。また、写真撮影・図面作成・遺物取り上げ・遺物カード作成等、実に様々な調査過程に参加しました。発掘調査の技術・方法は日本と共通する部分が多く、日韓でそれほど大きな違いは感じませんでした。夕方、調査が終わると、現場事務所で出土遺物を熟観させ



チョクセンB1・2・3号墳の全景

てもらい、調査員の皆さんから新羅土器を中心とした遺物資料について年代や特徴等を教えて頂き、お互い意見交換するなど、とても有意義な時間でした。

チョクセン遺跡の発掘調査に参加した感想を一言で表すことはとても難しいのですが、とにかく出土遺物の質と量に圧倒されました。滯在中に古墳踏査や古墳関連資料の探索もおこないましたが、発掘調査と資料見学等を通じ、墳丘規模にても副葬品の質と量にしても慶州と周辺地域との差は大きく、こうした違いが明瞭に感じられました。このように当時の社会を肌身で感じとることは、発掘調査に参加しなければ得られない体験であり、発掘調査交流の大きな利点だと感じました。

ただ、私の稚拙な韓国語では限界があったので、言葉の問題に悩むこともありました。現地の訛りが理解できずに、相手を困らせてしまったことは数知れず、最初は一人で何もできず不安だらけでした。絵による説明、身振り手振り、時には英単語まで動員して何とか意思疎通し、最後はどうにか日常生活に困らなくなるレベルになって、現地の研究者と都城・寺院・古墳について意見交換もできました。

発掘調査交流は文字通りの調査を通じての技術交流はもちろん、研究者同士の交流と言う点でも大きな意義があります。

今回、韓国で多くの方に出会うことができました。なによりも韓國の方々の数えきれないほどの親切と思いやり、さらにたくさんのおいしい料理やお酒のお陰で、2ヶ月の滞在を無事終えることができました。この思い出は、発掘調査参加という経験に勝るとも劣らない私のかけがえのない財産となりました。今後はこの経験を活かし、日韓交流の一助となれるよう頑張ろうと思います。

(都城発掘調査部 青木 敬)



油圧ショベルのバケットに乗り、遺構の撮影をする筆者

正倉院宝物と同じ刀子金具を発見！

2006年、西大寺食堂院の発掘で、平城京内最大級の井戸が発見されました。板材を組み合わせた2.3m四方の井戸です。年輪からわかる井戸桿材の伐採が767年、井戸内に捨てられた一番新しい木簡の年紀が延暦11年(792年)と、この頃に使用された井戸です。井戸内からは食事具・食器・食べカスなど、お寺の「食事処」の様子がわかる多くの遺物が出土しました。この井戸の埋土を1200箱持ち帰り、根気よく水で洗って遺物を取り出す作業が2009年2月まで続きました。ある時、ボツリと現れたのが鯨のような形をした小さな金具。大刀の「山形足金具」と呼ばれるものに似ていますが、それにしては小さい(左下解説図の写真が原寸大)。調べてみると、正倉院宝物の刀子金具と同じものだと判明しました。中央の孔には小さなリング(鑓)がつき、そこに組紐(打紐)を通して腰に吊下げるための金具(帯執金具)です。

あらためて平城宮の過去の調査を見直してみると、平城宮東南隅(第32次調査)で出土した金具が同じものだとわかりました。こちらはリングも残っています。2つの金具を科学的に分析すると、表面に金も確認できました(右頁グラフ参照)。どうやら、金ピカの高価な金具だったようです。この金具は、正倉院宝物以外の発掘品としてはほとんど確認されておらず、大変高貴な人だけが持てる刀子だったようです。さて、平城宮東南隅では、金属生産に関する遺物が多く出土しています。もしかしたら、正倉院に入るような高価なモノを作る工房が近くにあったかもしれません。今後の調査研究の進展に乞うご期待です。

(都城発掘調査部 城倉 正祥)

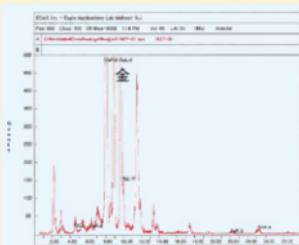
刀子帯執金具(原寸大)の出土地点



正倉院宝物 牛角把白銀嵌形鞘珠玉莊刀子 (全長18.8cm : S=2/3)



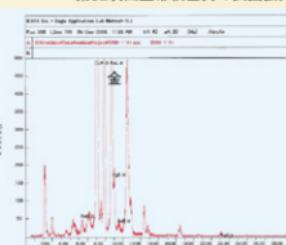
平城宮第32次調査出土の大刀山形足金物（左上）と刀子帯執金具（右下）、西大寺食堂院井戸出土の刀子帯執金具（左下）



西大寺出土帯執金具の表面拡大写真と成分分析データ



第32次出土帯執金具の表面拡大写真と成分分析データ



【退職者のひとこと】

研究所入所の頃

私は1974年4月1日に奈文研に入所したのですが、同時期に採用されたのが、百橋明徳・岩本正二・川越俊一各氏と東北大大学から転任した須藤隆氏でした。私の勤務場所は平城宮跡発掘調査部考古第3調査室で、室長は森郁夫氏、室員は岡本東三・金子裕之・須藤隆の各氏でした。この年の4月から埋蔵文化財センターが設置され、1975年の3月からは飛鳥資料館が開館するという、奈文研の組織が最も拡大しているときでした。この考古第3調査室は瓦の調査室なのに、1974年の3月末まで岩本圭輔氏、4月11日まで松沢亜生氏が室員でいたため、4月初頭の段階では、松沢氏が作った石器が考古第3の部屋中に積まれて置いてあり、また岩本氏も時々顔をだしては、細石刃などを作り、旧石器研究室のような外観を呈していました。私は卒論・修論とも旧石器をテーマにしていたので、直ちに松沢氏に弟子入りした恰好となり、瓦の部屋の新人としてはダメな人間として出発した訳です。この時、瓦部屋の森郁夫氏は室長として最も気合いの入った時期であり、瓦部屋の研究会を主催し、毎回のごとく自説を発表していました。この情熱が、岡本・金子・須藤そして松沢氏までも、何らかの形で瓦の論文を書かせる原因となったものと考えられます。

奈文研での1年目の発掘は薬師寺西僧坊でおこないましたが、私が瓦調べようと思ったのは、西僧坊間仕切り使用瓦が平安時代の復古瓦ではないかと思い、平安時代の瓦を編年しようと考えたことがきっかけです。この復古瓦という発想は、西僧坊の発掘中に、私が発掘現場から瓦の部屋に帰ると、こんな、いい瓦が出土しているといって、森郁夫氏が瓦部屋で食べ物を用意して待っていてくれたことがきっかけでした。本薬師寺から運ばれた完形の軒瓦です。2日後、私は発掘中に完形の瓦を見て、あっ、古い、いい瓦だ！と言ったのですが、発掘担当室長の岡田英男氏は、これは、明治の修理瓦と、ひとめ見ただけで言い当てました。泥を取ると、たしかに明治三十三年森田仙助と印が押してあるのです。自分の眼力の無さを恥じました。奈文研で第2の師匠に出会ったのです。 （副所長 山崎 信二）

奈文研30年

1976年入所以来、途中、奈良市にいた3年間を除けば、ちょうど30年ということになる。その間、平城、藤原、飛鳥資料館、埋文センター、企画調整の各部署を経験させていただいたのであるが、「それぞれ、いついた」と尋ねられると、自分のことながら、あやふやな答えしかできない。人間の記憶というものは、なんといい加減なものなのか、それとも個人的な問題なのであろうか。



前列左から、西村管理部長、千田上席研究員、山崎副所長、山中文化遺産部長
後列左から、小林企画調整部長、飯田業務課専門職員、西口考古第二研究室長

奈文研は昼休みのサッカーが盛んで、入所すると、何よりもまず足の大きさを聞かれる、というまことしやかな噂を耳にしていたが、私の場合は、なんのまえふりもなく突然、「お前は青だな」であった。これは予想外のことであって、サッカーのチーム分けで青チーム、ということを理解するまでにいさざかの時間を要したことは言うまでもない。また、3ヶ月にも及ぶ発掘現場を乗りきる体力を養うためにも、昼休みのサッカーはもってこいであるとも言われた。入所2年目から3年目にかけて、平城で1~3月、現場班の編成替えで引き続いて4~7月、さらに、飛鳥藤原へ異動して12~3月と、数多くの発掘現場を経験することができたのも、きっとサッカーをしていたおかげであろう。もっとも、サッカーでは、おでこを切ったり、頭を縫ったり、いろいろおと騒がせしたのであるが…。思えば、それぞれ前厄、本厄の年であった。因みに後厄の年は、奈良市へ異動したので、怪我する機会は失われた。

奈文研では、何度か出入りした平城が一番長かったのであるが、いずれも、土器を避けた異動であった。入所して新人研修を受けていた頃に、「お前、土器の図…、まあ、ええわ」と言ったT部長の一言が思い出されるのである。それはともかく、ともと、それほど器用でもないので、自分でやってみることが好きで、学生時代にはタガネを作て、遺物と同じように、文様を彫ったり透形をしたりしていた。そういうわけで、奈文研で飛鳥寺出土挂甲の復原に携わることができたのは、望外の幸せであった。また、弓矢を作り飛ばすこともした。実際に作ってみると、頭の中で考えていた通りにはいかないことが、逆に思いもよらないことがわかつたりすることがあり、結構「どきどき、わくわく」しながら進めたものである。

こんなことを書き続いていると、今度は「お前、研究所の仕事…」と言われそうである。「まあ、ええわ」と言ってお許しをいただきたい。30年間、お世話になりました。（企画調整部長 小林 謙一）

私がしてきた仕事

70年安保闘争など学生運動のうねりの中で、新たな世界を展望する歴史学への思いを抱きつつ奈文研に入所してから、38年が過ぎる。その間、私が携わってきた仕事の一つに、官衙遺跡発掘技術の向上と

情報の共通化の推進がある。それは第一に、1970年代以降に官衙遺跡の発見例が増加し、その調査研究が注目され始めてきたこと、第二に、柱穴をいきなりの半截・完掘して貴重な情報を抽出できていない現場が多かったこと、第三に、最新の知識・技術や調査成果が共有されず、発掘方法や遺跡の保存対策に苦慮している状況があったからだ。

こうした状況を改善すべく、官衙研修や調査助言、情報のデータベース化と公開、「古代の官衙遺跡」の編集などをおこない、また、古代官衙・集落研究集会を通じて、各地の調査員や研究者との情報交換やネットワークの構築なども図ってきた。このように、文化財行政に資する研究課題を自ら設定し、それに取り組める環境を与えていただいたことに感謝したい。

官衙遺跡はなかなか自らの正体を明かしてくれない。その正体を見破る万能試薬の調合もままならないから、遺跡の性格を早く的確に判断することは容易でない。一方、そのようにやっかいな遺跡だけに、官衙関係遺跡との対話は、謎解きや未知との遭遇という楽しさを味わえる世界でもあった。また、官衙遺跡は律令国家の成立や変遷を探るうえで重要な位置を占めているから、学生時代に抱いた歴史学的国家論などへの熱い思いを呼び覚ましてくれる機会でもあった。その意味では大切な人に巡り会ったようなものだ（奈文研では、人生の伴侶となる人にも巡り会っちゃったのだが）。

この仕事は、諸先輩が培ってこられた資産や同僚など皆様の協力のお陰で進めることができたことは言うまでもない。しかし、奈文研の資産に38年間の利息を付けて恩返ししてきたのか、甚だ心もとない。

膨大な集落遺跡の資料を歴史資料として生かし、その発掘の意義を市民に示すことなど、国内にも文化財行政に資すべき研究課題は山積していると思う。今後は皆様のご活躍を一市民として見守りたい。

（文化遺産部長 山中 敏史）

四十年と、ちょっと。

「お帰り」と、憶えていてくれる人もあるって、2007年4月、わたしは20年ぶりに「奈文研」に帰ってきた。庁舎も築何十年の貫禄に、ますます風格を増し、「まだ、そのままやったんやなあ」と、それにも妙な感懷があつたり、あのころは会計課といった

部屋の自分が座っていたあたりを思いだす。窓越しに、夏になると、うすい紫の花をつけるムクゲの木が、確かにあったはず。

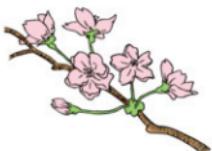
最初に転任してきて2年目、1986年から始まった長屋王邸古跡やその周辺の発掘で11万点もの木簡が出土した。用意したコンテナは、またたく間に足りなくなってしまって、新米の用度係長は、係の人と一緒にその緊急手配をする「お役目」を担うこととなる。宮跡の発掘開始前には、現場ハウスと仮設トイレを先ず用意して、埋め戻しには、トラック何台分かの砂を発注する。空撮のためのヘリコプターは八尾の飛行場から飛んでくる。

前任の博物館とは、まるで違う仕事も、活気があって面白かったし、現場を終えたあととの研究員の人人が誘ってくれる「放課後」も、また楽しかった。

あのころ小学生だった娘は言っていた。「お父さんの研究所のこと、新聞によく出てるね」。ちょうど社会科の時間に、奈良の都のことなどを勉強していたのだろう。仕事の締め切りや日ごとの伝票処理や東京からの電話に追われていて、発掘のことや研究の中身などほとんどわからなかつたが、「お父さん」としては、ちょっと鼻が高かつたものだ。

広島、東京、大阪勤務と、奈良博を経由して戻ってきた、2度目の「奈文研」は、高松塚古墳の発掘調査と石室解体のさなかにあった。そして、平城宮跡の国営公園化や遷都1300年祭に向けて、研究所を取り巻く状況や、独立行政法人としての運営の難しさなど、課題はますます大きくなるばかりだ。

公務員として勤めはじめて（いまは、独法職員ということになるが）、40年とちょっとのうち、奈文研は6年。生來の気短かで、若い頃はよく人とも衝突した。まわりの方々のご辛抱とご理解をいただいて、ともかくなんとかやって来ることができたのだと思う。いまなら打ち明けてもいいだろう。仕事がうまくいかなくて、宮跡の中の道をとぼとぼ歩いていたこともあるのです。そうして今、2度にわたって奈良文化財研究所の一員として送ることができた幸せを噛みしめている。（管理部長 西村 博美）



光は西へ—奈文研へ

奈良にやってきたのは1973年4月。同期に入所した新人は6名、年齢には幅があった。文化庁の出向から戻った金子裕之氏も含めた7名は、研修だけではなく、研究会をはじめいろいろな場面で、行動をともにしていた。

奈文研ではなんといても発掘調査の思い出が中心となる。発掘は平城、藤原両地区とも経験した。入所するとまず、平城宮の研修現場に入る。しばらくは、いっしょに仕事をする発掘作業員の奈良弁を理解するのに必死だった。入所2年目になると大きな現場の発掘担当者をまかされる。自分は薬師寺西僧房の調査だった。古代の僧侶の生活が、火災により焼け落ちて、そのまま埋まっていた稀有な現場である。その頃の薬師寺は金堂の再建工事の真っ最中。本坊では毎日、我々現場班のためにきしめんを準備して頂いており、朝一番に奈文研側の人数を遅滞なく連絡するのも担当者の重要な役目だった。発掘現場は、多数経験した。担当者になったのは、平城宮、藤原宮以外では、大官大寺回廊、本薬師寺西塔などである。そうした遺跡の理解のためにも、日本だけでなく、広く東アジアに目を広げる必要を痛感し、勉強の範囲をひろげるきっかけとなった。

入所してまもなく、ある研究室に顔を出したら、無口な田中哲雄氏からいきなり「何センチ？」と聞かれた。サッカーシューズの寸法である。否応なく毎日はグラウンドの生活が始まることになる。藤原へ移ってからはポジションはもっぱらキーパー、取つて当たり前、取りこぼしたらばらくそに野次が飛ぶ、という世界だ。仕事を終え、夕方になると一室に集まり、サッカー談義に興じるという毎日だった。

発掘以外では飛鳥資料館でいろいろな特別展に関わることができて、新しく目を開かされたことが多かった。両調査部での遺物整理、報告書作成に関わる思い出も尽きない。どの部署でも個性の強い先輩方がいた。また考古学だけでなく、建築史、文献史をはじめ、学際的な雰囲気のなかで多くを学んだ。有難いことと思っている。

東北の田舎から東京の大学へ、そして就職は奈良へ。時あたかも新幹線が西へ西へ延伸していたころで、そのキャッチフレーズ「光は西へ」は自分の奈文研での思い出に重なる。

（企画調整部 千田 剛道）

振り返れば発掘現場

退職にあたり一文を求められた。「遅筆文盲」なるが故に切羽詰った日々だというのに。何を書けばいいのか。披露すべきことなど思いつかない。あるのは在職証明としての思い出か。想い迷っていたら〆切が過ぎた。人には長く、自らには短い36年。うち、現場へ出なかつたのは、1976年の飛鳥資料館勤務と2003年の埋文センターの2年だけ。ずっと同じことの繰り返し。そんな気もする。

1973年、2度目の年男。誕生年を入れたら3度目か。記念すべき最初の現場は平城宮内裏地区での研修現場。大きな石敷井戸周辺の実測を同期生と二人で1週間かかり「遅い」と叱られた。その他は覚えていない。この夏は三笠中学跡地の井戸底の砂利洗いで過ぎ、秋にはウワナベ古墳の埴輪が待っていた。洗浄・接合でその年は暮れ、明くる2月、「原稿はまだか」「遅い」の次の一言、「来年は藤原」で平城のことは夢となる。まさに終始一貫、5度目も同じか。地道を自転車でたどりつつ、年に2回の大きな現場（この年は大官大寺金堂と藤原宮大極殿院西外郭）と不時の小さな現場。それらを通して、発掘の楽しさや道具と人の使い方を諸先輩・同僚そして作業員さんに教わった。平吉遺跡、飛鳥寺、山田寺、坂田寺…。1981年から石神遺跡、水落遺跡、雷丘東方遺跡、飛鳥池遺跡、そして藤原宮。面積の大小、報道の有無に関わらず総てが第一級の遺跡。それらに携わる幸福な時間の連続。飛鳥藤原の30年。最後の4年は平城で。図面をみれば土色までが蘇り、掘り間違いが夢に出る。現場にいなければ整理室。出土土器には現場の様子も、使った人、作った人の生活や思いがこもり、それらに触れるようで時（間と宿題）を忘れた。「飛鳥は怖い」という。しかし、本当に怖いのは出なかつた場合。「9割9分は遺跡の力。気づかなければゼロになる。」これは真実。見落として無いか。先入観、迷路に陥って無いか。真価の何割、いや何分を引き出し得たのか。それらが何も言わぬことをいいことに…。

振り返ったその先には、切れかかった堪忍袋の紐を繕いつつお付き合い頂いた方々がいた。その恩に報いることは何一つしていない。せめて一言、ありがとうございました。「遅い！」今頃言っても、もはや聞こえない人もいるではないか。」

（都城発掘調査部 西口 勝生）

定年退職???

1970年9月入所以来、38年9ヶ月、奈良国立文化財研究所（公務員）・独立行政法人奈良文化財研究所（公務員型）・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所（非公務員）と、3回も名称が変わることを、経験致しました。

入所当時は、何年奈文研に勤められるかなと考えていました。それが定年退職、自分自身驚いています。

仕事では自動車運転手として採用され、何人もの、文部大臣・皇室・その他沢山の人を乗せ、いろいろな場所へ行きました。帰り道がわからなくなり、警察・消防署で道を聞きながら帰つたことも多々あります。今は良い思い出です。

独立行政法人になる前の年に、事務官に変わり現在の仕事をしています。

現在の仕事は毎日毎日朝が早く、眠い目をこすりながら勤めていましたが、それにも慣れ、発掘事務は変化に富んだ楽しく苦しい仕事、でもいろいろな現場を見せていただきました。

それから、レクリエーション（奈良地区共済）で野球・卓球・バレーボール・ソフトボールに参加し、奈良地区の公務員の人たちと楽しく、スポーツに汗を流したのを思い出します。

昼休みはサッカーを雨の日、雪の日、毎日玉を蹴り、それに飽き足らず、奈良社会人リーグに登録したいと思い、リーグ登録には審判の資格が必要なので、二日間、学科・実技を受けて資格を取り、やっと登録。自衛隊・刑務所（受刑者）その他沢山のチームとの試合に土曜日・日曜日朝から夕方まで、サッカーをしていました。

還暦祝も、有志の方々に、盛大に、開催して頂き感謝しています（写真）。

最後に38年6ヶ月、長い間本当にありがとうございました。

（管理部 飯田 信男）



飛鳥資料館春期特別展から

「キトラ古墳壁画四神—青龍白虎—」

平成21年4月17日(金)～6月21日(日)

今年もキトラ古墳壁画の特別公開とそれに開かれた特別展の季節が巡ってきました。5月8～24日に特別公開されるのは、青龍と白虎です。現在資料館では、特別展の準備として、泥に覆われてみえない青龍の推定復原をおこなっています。その過程で、いくつかのたいへん興味深い点に遭遇しました。今回は、そのうちの1点について述べます。

キトラや高松塚の青龍と白虎は、墨紙を使って描かれているため、輪郭や細部表現が近似することが知られています。そこで、キトラ白虎をよく観察したところ、なんと、右側の前・後肢は3本指、左側のものは4本指であることが判明しました。あわせて、高松塚の青龍・白虎をみたところ、青龍の左前肢に爪を表現する4つの赤い点を確認でき、他はいずれも3本でした。さらに、類例を探したところ、平城薬師寺の本尊薬師如来台座の青龍もキトラ白虎同様、体側で指の本数が異なることがわかりました。

奈文研OBでもある山本忠尚・天理大学教授の研究では、中国の四神の指の数は3本が基本で、唐代の開元年間ごろから4本のものが現れるということです。どうやら指の本数は、四神図の年代観にも関わる重要な観察項目といえそうです。それにもしても、キトラ、高松塚、薬師寺の四神にみられるこの不思議な現象をどのように理解すべきなのでしょうか。思い悩んでいるところです。

(飛鳥資料館 加藤 真二)



キトラ古墳壁画「白虎」前足

■ 記録

埋蔵文化財担当者研修

○中世城郭調査課程

平成20年12月11日～18日 29名

○報告書作成課程

平成21年1月14日～23日 23名

○寺院遺跡調査課程

平成21年2月2日～6日 16名

○生物環境調査課程

平成21年2月17日～25日 8名

現地説明会

○飛鳥藤原第156次（石神遺跡第21次）

平成21年2月14日（土） 1611名

平城宮跡歴史文化講座（第7回）

（NPO平城宮跡サポートネットワークと共催）

平成21年1月25日（日）午後1時30分～

於：平城宮跡資料館講堂

「聖武天皇の相次ぐ遷都」

小笠原 好彦 滋賀大学名誉教授

■ お知らせ

公開講演会（第104回）（開催場所は未定）

平成21年5月23日（土）午後1時30分～

於：平城宮跡資料館講堂

「古代火葬墓の世界」

小田 裕樹 都城発掘調査部研究員

「高床式建物を探る－出土建築部材と雲南の実際－」

黒坂 貴裕 都城発掘調査部研究員

平城宮跡資料館休館のお知らせ

平成21年6月1日～平成22年3月31日

平城遷都1300年祭に向けて改装工事をおこないますので、休館させていただきます。

■ 最近の本－所員の著作から

○松村恵司『日本の美術512 出土銭貨』

至文堂、2009年1月

○渡辺晃宏『平城京と木簡の世紀』（日本の歴史04）

講談社学術文庫、2009年1月

○城倉正祥『埴輪生産と地域社会』

学生社、2009年3月

編集「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp/>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2009年3月